

日本美術はいかに語られてきたか？

—欧米の博物館・美術館の中の日本—

吉田憲司

国立民族学博物館長



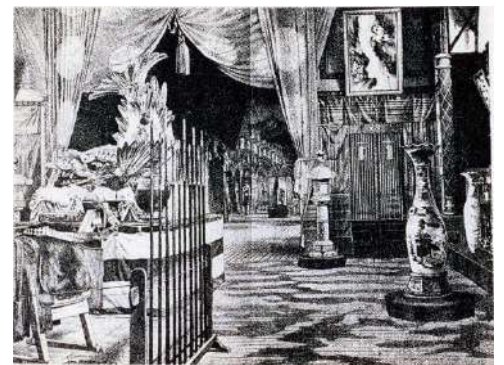
略歴

国立民族学博物館館長、総合研究大学院大学教授。文化人類学、博物館人類学専攻。京都大学文学部哲学科卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了、学術博士。1987年大阪大学文学部助手、1988年国立民族学博物館助手。その後、同館助教授、教授を経て、2017年4月より現職。アフリカを中心に、仮面や儀礼、キリスト教の広がりについてのフィールド・ワークを続ける一方、ミュージアム（博物館・美術館）における文化の表象のあり方を研究し、その作業から得られた知見を反映した展示活動を国内外で展開している。『文化の「発見」』でサントリー学芸賞など受賞。その他の著書に『宗教の始原を求めて』『仮面の森』など。

二つの「日本美術」

海外の博物館・美術館を訪れて誰もが気づくのは、多くの場合、日本の美術が根付けと刀剣、浮世絵で代表されていることである。一方、日本人がイメージする日本美術史のなかでは、浮世絵はそのなかのごく一部にすぎず、根付けにいたっては議論されることすら稀である。

明治政府は、1873（明治6）年のウィーン万博以降、「殖産興業」の観点から、海外で高い評価を受けた工芸品の輸出を積極的に進めた。服の導入で不要となった根付けや印籠、印刷物の普及とともにその役割を終えた浮世絵が大量に国外に出、ヨーロッパの人びとの目をとらえていく。時期を同じくして、明治政府による神仏分離令（1868（慶応4）年）とそれに端を発する廃仏毀釈の運動によって、各地の寺院に収められていた仏像や絵画が、寺の所有を離れ、多くが海外に流出する。現在に至るまで、欧米において、自館のコレクションをもとに企画される美術展は、こうした動きの中で収蔵されるに至った作品をもとに構成されている。



1873（明治6）年 ウィーン万博日本品陳列所
（『壘国博覧会参同紀要』1897年より）

これに対して、日本人の多くが身につけている日本美術史は、もとを正せば、1900（明治33）年のパリ万博において、古美術とともに出品するために当時の帝国博物館（現在の東京国立博物館）の手でまとめられた『稿本日本帝国美術略史』に端を発する。この書は、帝国の美術の変遷を説くものとして、天皇にかかわる美術を中心に各時代の権力者たちの「宝物」によって構成された。そ

これらの作品は、仏教渡来以前・飛鳥・奈良・平安（弘仁・藤原）・鎌倉・室町・桃山・江戸という時代区分のもとに配列された。その区分は現在の日本美術史においても基本的に変わっていない。現在、われわれが慣れ親しんでいる時代区分とそれぞれの時代の「基準作」は、このとき作り上げられたと言ってよい。

「殖産興業」に適う大量の工芸に基づいて作り上げられた海外での日本美術のイメージと、「皇国の宝物」で織りなされた国内の日本美術史観。両者が大きくかけはなれるのは当然の帰結といわなければならない。

欧米の博物館における日本美術のコレクション

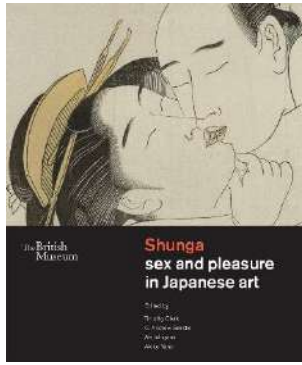
日本美術の作品は、海外でも西洋の美術と同じ扱いを受けて美術館に収められると、私たちは思いがちであるが、実は、必ずしもそうではない。とくに「古美術」といわれるような、江戸期以前の作品は、欧米では、まず欧米の作品を収蔵する美術館には入らない。博物館に収められるか、あるいは欧米の美術を所蔵する美術館とは別の、アジア美術に特化した美術館に収められることが多い。やはりそこには、欧米から見た自他の区別が色濃く反映している。と同時に、もともと英語では、ミュージアムという一つの語であったものを美術館と博物館とわざわざ訳し分けるようになった日本の私たちが、その区別を受け継ぎ、さらに強化してきてしまったことにも気づかされる。

欧米の博物館における日本美術の企画展示

常設の展示とは別に、期間を区切って開催される日本の古美術の企画展示についてみれば、欧米に所在する日本美術のコレクションに依拠した展示の場合には、現在に至るまで、やはり浮世絵、書画、輸出陶磁器に偏る傾向が顕著に指摘される。

一方で、とくに第2次大戦後、文化庁や国際交流基金などの手で、日本の「至宝」を海外でも紹介する展覧会が実現され、欧米における日本美術の受容にも変化が生まれ始めた。たとえば、1953年、アメリカのメトロポリタン美術館ほか全米を巡回した「Exhibition of Japanese Paintings and Sculpture 日本の絵画と彫刻」展は、日本側の文化財保護委員会が主体になって企画した巡回展で、6世紀から19世紀の国宝・重要文化財を含む絵画77件、彫刻・工芸14件計92件の日本美術の名品を展覧し、それまで中国美術の影響下で成立したとばかり思われていた日本美術の独自の広がりをアメリカの人びとに印象づけた。こうした、日本の重要な文化財の展示には、やはり、文化庁や国際交流基金の参画が不可欠になる。それは、別言すれば、文化庁や国際交流基金は、欧米で流布した日本美術の見方を、日本の私たちが身につけている日本美術の見方に修正あるいは誘導していくうえで、大きな役割を果たしているということでもある。

近年の海外での企画展示で、とくに注目を集めたものとして、大英博物館で2013年に公開された春画の展覧会、「Shunga : sex and pleasure in Japanese art」展と、昨年2019年の「Manga マンガ」展を忘れるわけにはいかない。いずれも、日本では、これまで「美術展」としては成立しなかった企画である。ただ、「春画」展に関しては、その後、東京の永青文庫、京都の細見美術館で開催が実現している。



「春画」展カタログ（大英博物館、2013年）

の表紙

振り返ってみれば、春画や漫画に限らず、海外での関心の高まりを受けて国内での作家や作品の再発見、再評価につながるという例、いいかえれば、私たち日本に住む者の目が、海外での展示を受ける形で変わっていくという例は、いくつも確認できる。博物館・美術館における異文化の展示、異文化に属する作品の展示は、そのようなまなざしの相互作用の場にほかならない。